

就職面接場面に於ける会話表現と人間関係

—面接による性格分析の信頼性、妥当性の検討および進路指導への活用—

Verbal Expression in Job Interviews and Human Relations

—The Reliability and Validity of Character Analysis
by Interview for Career Guidance Purposes—

西河 正行*

Masayuki Nishikawa

鐘ヶ江 弓子**

Yumiko Kanegae

1. はじめに

筆者らは、就職面接訓練を利用して学生の進路指導を改善すること、および就職面接場面における会話表現から人間関係を分析することという、相互に関連した2つの観点から本研究に取り組んだ。

前者については、具体的に次のような問題を設定した。秘書専攻では、実社会で即戦力となる専門職業人の養成をその教育目標としている。そのため専門知識や技能の習得ばかりでなく、職業選択を青年期の発達課題として捉え、この課題達成の援助となるような職業指導を行うことを目指している。しかし筆者らの経験では、実際には学生にとって就職活動は場当たりの会社選択に終始してしまっていることが多いように思われる。その理由としては好転の兆しを見せてはいるものの「就職氷河期」と言われるような社会的、経済的要因があげられることは勿論であるが、そればかりでなく学生自身の自己分析の不足や職業的自我同一性の未確立なども大きな要因になっていると考えている(西河, 1985, 西河, 1991, 西河, 1993)。そこで我々は学生の自己分析を助けるために、就職面接訓練が利用できないかと考えた。これまでの就職面接の訓練は、立ち居振る舞いや応答の仕方な

ど面接の形式的な側面に重点が置かれ、面接で語られる内容については各人の努力に任せられていた。しかしカウンセリングが対話を通して本人の問題解決を図るための援助をするように、就職の面接訓練自体が自己探索の機会になりうる可能性があると考えたのである。つまり面接場面に現われてくる学生の能力、性格、対人関係のあり方などを、指導者が適切に分析することができれば、それを学生にフィードバックすることで学生の自己分析を援助できるのではないか。その時、自己探索の効果を上げるために面接をどのように行うのがよいかを検討することが必要となる。

ところで一般に進路指導では自己と職業との適合性が重視されるが、それは先天的、後天的な能力の側面と職業的興味や価値観などで代表される性格的側面から把握される。しかし短大生の就職の現実を考えると殆どの学生は企業に就職しており、能力的側面や性格的側面よりはむしろ職場適応が重視される。従って対人適応についての自己理解を促進するような面接訓練をすることが、進路指導の上でも意義があると考えられる。従ってそのような自己理解を促進するような面接訓練はどのようなものであるかが問題となる。

後者については、次のようである。現実に就

職試験では筆記試験と並んで面接試験が重視されている。人事採用に於いて、人材の選別・選抜をどのように行い、その選別・選抜にはどの程度の信頼性、予測的妥当性が確保されるかは重要なポイントである。「産業・組織心理学研究の動向」(産業・組織心理学会, 1994)を見ると、近年、面接試験の信頼性、妥当性の研究はあまりなされていないようである。因みにこれまでの研究で明らかにされているのは、以下のような知見である。例えば一人の面接者の判断や評定の一貫性については比較的満足できる信頼性が得られているが、面接者間の評定の一致度はかなり低い。また面接が構造化されている程、また評価の対象となる情報の共通性が高くなる程、面接者間の評定の一致度は高くなる。さらに「能力・知識」などの知的側面に比べ、「性格・人物」や「意欲・熱意」などの動機的・情意的側面の評定は信頼性が低くなる。一方、面接の予測的妥当性については確固たる結論を引き出しにくい。基準変量に総合的能力の評定値を取った場合、妥当性は高くなるなどである(大沢武志, 1973)。後者については、若林・南・佐野(1980)の研究でも、面接試験は、精神的分化度、小論文、英語、面接を合計した総合的潜在能力尺度と高い正の相関を持っており、それら個別のテストバッテリーと正の相関を持っていることが明らかにされている。

本稿では、就職面接場面における会話表現から人間関係を分析するにあたって、それを就職面接の信頼性と妥当性の問題として設定したい。すなわち就職面接試験における会話表現を通して、評定者間でどの程度の評定の一致が見られるものか(信頼性)、またどの程度「性格・人物」について評定が可能であるか(妥当性)に主として焦点を当てたいと考える。特に後者については、以下に述べるCCRT法を利用して併存的妥当性を調べたい。

心理療法の領域、特にお話療法と呼ばれる、精神分析的な心理療法や来談者中心療法などでは、面接過程の分析が種々、行われてきた。本稿では精神分析的な心理療法の分野で治療者が患者の

動機や主要テーマを理解するための技法としてルボルスキーによって開発されたCCRT法を参考にこの課題に取り組みたい。そこでまず簡単にCCRT法について概説する(西河, 1995)。

(1) CCRT法の概要

ルボルスキー(Luborsky, 1984)によれば1970年代の終わり頃から心理療法の効果の比較研究を進めるために、精神分析的な心理療法、対人関係療法、短期力動的な心理療法などいくつかのマニュアルが出版されてきた。精神分析的な心理療法の分野では、ルボルスキーが精神分析的な志向性を持つ支持-表出的心理療法(psychodynamically oriented supportive-expressive psychotherapy)の治療マニュアルを開発してきた。彼はマニュアルを開発する過程で、治療者が患者の動機、主要テーマを理解するために従うべき図式、指針-CCRT(中核的葛藤テーマ Core Conflictual Relationship Theme)法を明確にしてきた。

彼によれば精神分析理論では「最も接近しやすく治療的に扱える心理的葛藤は対人関係の問題である」と考えるので、精神分析理論から導き出された支持-表出的心理療法では対人関係上の主要テーマを正確に決定することを重視する。すなわち内的な状況にはいろいろな型の中核的葛藤関係があり、患者には他人の行動は中核的葛藤関係の型に一致しているように見える。このような患者にとっての内的、外的状況が症状と心的苦悩を引き起こし持続させている。また中核的葛藤関係パターン中に表出される葛藤は、潜在的に転移を生じさせる可能性を持っている。そこでCCRT法において、症状を理解するために対人関係の文脈の中で中核的葛藤関係パターンを定式化しようとするのである。具体的には、CCRTのテーマは願望、要求、意図(イド衝動の派生物)と、それらが表出されることに伴う、内的外的な状況を、情報として認識させる統御機能、あるいは遂行機能(自我の、あるいはそれから派生した超自我の中心特性)との2要素からなっており、それが葛藤してい

る。そして後者の作用により、「願望、要求、意図」に対する反応（「対象の反応」と「自己の反応」）が決定される。CCRTはこの願望とその結果である対象と自己の反応を一人称を用いて表現することにより、公式化される。従ってCCRT法による臨床公式化では、対人関係上の主要テーマは（1）治療場面における患者と治療者の現在の関係、（2）治療場面外での家族、友人、同僚等との現在の関係、（3）過去との関係、特に両親像との関係、に現れてくるので、対人関係3領域のそれぞれに順番に注意する事になる。すなわちCCRT法は、（a）観察の単位を対人関係上のエピソードに限る、（b）CCRTを患者の願望、要求、意図と、それに対する結果の記述を含む文として表現する、（c）臨床判定者はエピソード全体を通して最もしばしば表現されているテーマを抽出することからなっている（Luborsky, 1984）。

ところでCCRT法による対人関係上のテーマの公式化の方法には tailor-made categories method と standard categories method の2つがあり、両者はCCRTを特定する手続きに違いがあり、tailor-made categories method では個々のクライアントにあわせたカテゴリー作りをし、standard categories method では標準的カテゴリー・リストに基づいてエピソードにあったカテゴリーが選択される。前者はクライアントの個別性を把握できるという意味で個性記述的（idiographic）であり、後者は評定の信頼性や妥当性を確保した研究を可能にすると言う意味で法則定立的（nomothetic）である（Luborsky, 1984, Luborsky & Crits-Christoph, 1990）。

本稿ではルボルスキーもCCRTの臨床的利用においては厳密なスコアリングの必要はないと言っているように、研究の目的にあわせて tailor-made categories method を用いて検討を行うことにする。ここで彼の挙げる例を示しておこう（Luborsky, 1984）。

症例：C.K.さん（女性）

彼女の最初の主訴は、「私は、男の人とつき

あえないんです」であった。中核葛藤テーマの形で定式化すると、「私は対人関係でうちとけた態度がとれればと思っている（願望）が、拒否される（対象の反応）から、うちとけるのが怖い（自己の反応）」ようになる。

具体的な手続きとして、まず対人関係上の主要テーマを正確に決定することが必要であるが、1セッションでも7から10個のエピソードがあれば公式化には十分であるという。次にCCRT記録用紙のフォーマットに従ってそれらのエピソードを患者の「願望、要求、意図」とそれに対する結果（「対象の反応」と「自己の反応」）を分けて記入し、それに基づいてCCRTの要約を行う。その際エピソードには3つの要素すべてが含まれなくてもよく、推測する場合もある。CCRTの要約は、CCRTの概括的な公式化、概括的公式による検討、概括的公式の修正の3段階を踏んで行われる。概括的公式化は、記録用紙を何度も読み返し、共通要素を抽出することによってなされるが、必要以上の抽象化はしない。概括的公式による再検討は、記録について概括的公式に含まれるすべての要素が考慮されており、そこに当てはまるものがすべて記録されていることを確認するために行われる。そしてすべての要素をCCRT要約用紙に記録し、最も頻度の高い願望、自己の反応、対象の反応がCCRTを構成することになる。このようにCCRTの臨床公式化は各要素の出現頻度が概念化をみちびく基準となっているが、その他にルボルスキーは出現順序も参考にするように述べている。

（2）研究の目的

本稿の目的は、上述のように、短時間の就職面接訓練を通して学生の人物評価、性格分析を行う場合、面接評定者間の一致度（就職面接の信頼性）がどの程度であるか、およびその人物評価、性格分析はどの程度正鵠を得ているのか（就職面接の妥当性）、を調べることであり、さらに就職面接訓練を自己探索、自己理解の機会として利用する可能性を検討することである。

そこでまず学生の面接訓練で得られた会話をデータとして、教員による性格分析、企業人による性格分析、CCRT法を利用した性格分析の三者を行い、CCRT法による臨床心理学的な性格分析を基準として見た場合、他の分析がどの程度評価の一致を見るか、教員による性格分析と企業人による性格分析はどの程度評価が一致しているかを検討する。本来はいずれの分析も複数人により行い妥当性を確保するべきであるが、とりあえず大規模な本研究に向けての予備的研究の一つとして、本研究を位置づけたい。

2. 方法

(1) 面接者と被面接者

面接者は秘書専攻の教員で、秘書教育を担当し、就職面接の訓練にも当たっている鐘ヶ江である。面接は1995年夏の海外研修旅行中に行われた。被面接者は面接者と所属の異なる英語専攻の1年生4人で、できるだけ性格の異なる学生を選ぶようにした。面接者は被面接者とは面識がなかったが、研修という事情もあり若干のラポールがあった。面接の所要時間は約30分を目安とした。面接の目的は、「就職面接について研究しているので、協力して下さい」というように説明した。

(2) 面接の手続き

就職面接には幾つかの方法があるが、ここでは上記の趣旨から圧迫面接のような方法は採用せず、自己探索の機会となるような open-question の形式を取った。そして面接で取り上げるテーマは、CCRT法では観察の単位を対人関係上のエピソードに限るので、それに従って「女性および男性の友人、目上の人との対人関係」に絞った。そして「あなたの女性の友人について話して下さい」のように、open-question で話してもらった。またCCRT法では対人関係の文脈の中で中核的葛藤関係パターンを定式化しようとするので、特に葛藤状況についても質問を行った。具体的には、例えば

「その人との関係で困ったり、喧嘩をしたりしたことはありますか」のように、しかし面接訓練はCCRT法やカウンセリングに必ずしも詳しくない教員によって行われるため、対人関係エピソードに「願望、要求、意図」と「対象の反応」と「自己の反応」の全てが含まれるように面接を進めることは断念した。

(3) 性格分析の手続き

性格分析を行う教員は面接者（鐘ヶ江）自身、企業人は人事・採用経験のある一流企業の管理職にお願いした。教員、企業人の判断の素材となる面接データは面接テープと面接記録とした。またCCRT法による分析は西河が行い、分析素材は面接記録のみを使用した。

(4) 性格分析における評価基準

教員および企業人が面接データを通して性格分析をする際に用いた基準を、評価後にそれぞれに言語化させた。そしてそれを比較、検討した。

3. 結果

ここでは始めに教員、企業人及びCCRT法による性格分析の結果を示し、次にCCRT法による性格分析を基準にした場合の教員、企業人による分析の妥当性を検討する。

(1) 教員、企業人及びCCRT法による性格分析の結果

以下に分析結果を示すが、CCRT法による性格分析では、エピソードが若干少ないこと、面接記録で全てのアイテムが満たされない（例えば「自己の反応」が欠けている）場合が多いことが問題と指摘されよう。しかしここではそれを力動的性格理解の限界と踏まえた上で概括的公式化を試みた（資料参照のこと）。

事例 1

(1) 教員による人物評価、性格分析

1. 話し方から、声のトーンが落ち着いており、一本芯が通っており、意志の強さが感じられる。負けず嫌いの人ではないか。
2. 女性や男性の友人との付き合い方、例えば、「自分にとって成長するのにプラスになる」、「お互いにそんな風にマイナスになる関係には絶対にしたくない」などから、自分にとっての損得、プラスを重視する人のようだ。
3. 「自分の目標とか生き方とかは見失いたくない」のように、付き合う相手にのめり込まない人。人間関係を突き詰めて考えず、客観的に見つめるタイプ。
4. 好き嫌いがはっきりしており、マイペースの人。
5. しかし友人との会話、言葉に重きを置いているようなので、言葉によって傷ついたり、くよくよ考え込むこともあるのではないか。
6. 全体に、柔軟性、協調性に欠けるように思われるが、仕事を任せれば最後まで責任を持ってやり終える人であると思われた。

(2) 企業人による人物評価、性格分析

女性の友だちについて「お互いに理解し合おうとして認め合って」話し合うことが「成長するのにとてもプラスになる」と話しているが、具体的な説明を求められても、「すてきな気持ち」、「すてきな時間」と観念的なことしか答えられない。恋人についても、楽しむことよりも「お互いの理解を深めるように話したい」と優等生的回答。これ以上いい人はいないんじゃないかと思っている恋人であっても「彼のことしか頭になかったり、そういうのは嫌」で「自分の目標とか生き方とかは見失いたくない」、「お互いにそんな風にマイナスになる関係には絶対にしたくないので、もし、そんな風になりそうだったら付き合うのを考えてしまう」と感情に流されることをよしとせず、あくまで理性的であろうとする。冒頭のモノローグ的しゃべり方は録音機を意識し、その場の期待にパーフェクトに答えようとした結果と思われ、与えられた仕事をきちんとこなそうという意欲の強い人と思われる。以上から、一般的に決められた仕事

は責任を持ってきちんとこなす人であり、安心して任せられる。しかし、固い人であるため、自分の優等生的価値観をはみ出すことが難しく、柔軟性や面白味に欠ける。このため人間的な膨らみや創造性にはあまり期待できない。

(3) CCRT法による性格分析

ここでは以下のような2つの概括的公式化を試みた。

公式化(1)「一緒にいて安心したい(理解し、支えたい)」と思い、「相手が話してくれ、大切に思ってくれる」と、「安心できるし、楽しいし、自分の成長のプラスになる」が、「半分しか理解されず、支えられない」と、「イライラする」。

公式化(2)「一緒にいたい、自分の目標、生き方を見失いたくない」。

(「一緒にいたい」願望の中に、「理解し合いたい」、「支え合いたい」、「安心したい」などの願望が含まれているように思われるが、面接記録から「一緒にいて安心したい」願望が根底に一番強くあるように思われたのでそれを中心にまとめた。)

事例1の主要な中核的葛藤は、「一緒にいて安心したい」(依存願望)と「自分の目標、生き方を見失いたくない」(自立願望)との間の葛藤であろう。恐らく自立願望を「理解されなかったり、支えてもらえなかったりする」時が最も危機的となるであろう。しかし事例1では「理解し合える」とか「大切に思ってくれる」という肯定的反応が多く、対象の否定的な反応が殆ど語られていないので、そうした危機が体験されていない、あるいは体験されていても否認されていると推測される。つまりこの人は現在のところ半ば依存したく、半ば自立したい状態に留まっていると言えよう。そうした事例1にとって、両者の妥協形成として、「自立願望を理解してくれること」、「支えてくれること」が対人関係の重要な条件となっているため、対人関係も自立的行動も表面的で硬直的なものになっていると思われる。

事例2

(1) 教員による人物評価, 性格分析

1. 話し方は中性的で, 語尾を上げるのが気になる。
2. 話が切れ目なく続き, 終結しない。
3. 「結構, 自意識過剰ってわけじゃないんですけど」, 「2, 3人で喋ってても, 私のことも見えてくれるっていうか」のように, 自意識過剰気味で, 自分がどう思われ, 評価されているかを常に意識しているように思われる。
4. 人から影響を受けやすく, 人のことが気になり, いつも気にしている。
5. 「本当に優しくって, 一人でいると声を掛けてくれる人」のように, 人とつきあい始めるきっかけは自分で作る方ではなく, 友人から声をかけてもらっている。
6. 「あまり勉強の話っていうのはしないんですよね」, 「あんまり勉強が得意じゃないっていうか, 好きじゃない」のように, 勉強熱心ではない。
7. 家族思いで, 姉に憧れ, 尊敬している。
8. スムースな人間関係を作ることを, 家庭環境の中から学んでいる。

(2) 企業人による人物評価, 性格分析

自分が問われていることの本質を掴んで適切に答えるということができない。相手の要求している物が何であるかを正確に理解することができないと同時に, 自分の言いたいことを説得力を持って理路整然と説明する力が弱い。質問者に再度「こんなんでもいいんですか?」と尋ねているように, 自分の応答に自分でも自信が持てないでいる。この場面に限ったことでなく自信のない人であろう。

対人関係でも「もしかしてこの人自分のことが嫌いなのかなあとすごく気にしちゃう」, 「ちょっと言われたりすると落ち込んで」しまい, 「嫌われたくない」と好意を抱いた人にも, 尊敬する姉にも自分の本当の気持ちを話せないという弱さが目立つ。友人とのつきあいの内容を聞いても, 本人が本当に楽しんでいる様子が感じられず, 周りに合わせて流されているだけという

印象。友人になったきっかけや, その人に惹かれた理由が全て「……とってくれた」, 「優しく一人でいると声を掛けてくれる」, 「2, 3人で喋っていても私のことも見えてくれる」, 「入学式の時, 隣に座っていて声を掛けてもらって」と, ひたすら受動的で積極性に欠ける。自己主張も弱い。それだけに協調性は高いと言えるが, 職場に面倒をみしてくれるタイプの間がないと続けられなくなる可能性がある。

(3) CCRT法による性格分析

この事例の心的力動は次のようである。「(暗い人間と思われ, 嫌われたくないので,) 明るい人間になり, 友だちを作りたい」と思い, 「相手が親身になって助けてくれる」と, 「すごい嬉しく, 心強い」が, 「嫌われていると思う」と, 「気にして, 落ち込む」。

このように対人関係における被害感が強く, 不安定になりやすいところがある。しかし「明るい人間になり, 友だちを作りたい」と肯定的になるところもあり, すると実際に「相手が親身になって助けてくれる」というように, 肯定的な体験ができるところが健康的なところである。

事例3

(1) 教員による人物評価, 性格分析

1. 「友だちと気まづくなるのが嫌い。そのために自分を押さえる, 喧嘩をしないように気遣う」のように, 人間関係を大切にし, 人とうまくやっていこうという姿勢が感じられる。
2. 「自分から声を掛けたいって, まあ始めはなかなかうまく行かないんですけどね」のように, 積極的に自分から友だちを作る努力をする。
3. 高校時代部活のキャプテンで, グループのまとめ役としてリーダーシップを取る能力がある。
4. 話し方から神経質に感じられる。
5. 「男の友だちとは男女の仲よりも性差を超えた友情を育てる」のように, 中性的な魅力を持つ。
6. 自分の進路についてしっかり把握している。

7.「英語を使って、……お父さんみたいにいろんな外国人と接することができるような仕事に就きたい」のように、父親を尊敬している。

(2) 企業人による人物評価、性格分析

問われていることに対して落ち着いた的確な応答ができる。要求されていることの本質を掴み、その全体像を見通しながら一つ一つの部分について過不足なく必要な情報を組み込み、理路整然と全体を組立てていく能力がある。

話の内容もビビッドで具体性に富み説得力がある。時に自分の弱みや本音も吐露していることから単にきれいな事を並べているのではなく、率直に語っている印象がある。これは、インタビューという状況に圧倒されず、自分自身でいられるからであり、基本的にどんな場面にも主体的に関わっていこうとできる人、つまり自分に対する自信、信念のある人であろう。しかも一方で、質問に対して「自分だけが思っているのかもしれませんが」、「とても具体的になってしまうのですが」と時に前置きして答えているように、自分の考えや応答を客観的な視点で捉える冷静さも持っている。この人の場合は、指示通りに課題をこなすだけでなく、本人の判断を信頼して仕事を任せられる可能性を感じる。

(3) CCRT法による性格分析

ここでは1つの概括的公式化を行うことができよう。「個性的で、(父親のように)仕事ができる人間になりたい(そのため友だちを参考にしたり、父などに相談したい)」と思い、「相手が優しくしてくれたり、分かってくれたり、鍛えてくれる」と、「プレッシャーが刺激になり、自信を持たせてくれる」が、「はっきり反対される」と、「カチンと来るが、抑える」。

この事例の中核的葛藤は2つの点で生じるように思われる。まず人を参考にしたり、人に相談したりして、はっきり反対された時に、気まぐずにならないように抑える点である。この点是对人的には無用の軋轢を生まず、社会的適応性を高めることに役立つが、内界にはコンプレクスとして鬱積する可能性があるだろう。次は好意的な反応の場合でも、本当はプレッシャーを感じ

たりコンプレクスを感じているのに、それを刺激にして前向きに取ろうとする点である。この点は個性化欲求の強さと相俟って、この人を自立的で個性的な人間にするのに役立つであろう。そして個性化が成功するほどプレッシャーをはねのけたことにもなり、自信も付いてくることになるであろう。しかしそこには強がりや否認があるので、それが破綻すると葛藤が体験されてくると思われる。つまりこの人はよく言えば頑張りやさんとして成功する面と、悪く言えば強がりやで終わってしまう面があると言えよう。

事例4

(1) 教員による人物評価、性格分析

- 1.「子供を育てる会」の運営、活動歴から、指導力、企画力、忍耐力、協調性が大いにある。
- 2.相手の目を見て熱心に話す。声に優しさ、柔らかさがある。
- 3.「どれだけ初参加の子とか……どれだけ来年も来たいなと思ってくれるかなとか」のように、仲間作りが上手。相手に対する思いやりがある。
- 4.「こっちは全然未熟だったから、助けてくれた人がその人ともう一人」、「いつもその人がね、助けてくれるから、他の人も助けてくれるけど」のように、仲間に対する感謝と連帯意識がある。
- 5.「8月のキャンプのために、4月からずっと下見に行き、そこに行くとか、あそこに行くとか、いろいろ下見して」のように、メンバーや子供たちを楽しませ、キャンプを成功させるためには時間や労力を惜しまない。

(2) 企業人による人物評価、性格判断

「子供を育てる会」での活動の話から有能な人物イメージが強烈にアピールされるが、問われているのは友人関係であって、その課題に適切な応答がなされているとは言い難い。本質的には、質問を捉える能力や、話をうまくまとめて説明する能力はあるのにも関わらず、ついつい話は脱線して「子供を育てる会」の素晴らしさ、そこで自分がどんな風に頑張っているかと

いう話を不適切に延々と続けてしまう。そして結局最後まで軌道修正もせず、脱線による不都合にも気がつかず、得々としている。ここから、自分自身を表現したい気持ちがあまりにも強いいため、冷静に課題に取り組めず、独りよがりになりがちであることが容易に伺われる。

恋人の存在について尋ねられ、いないと答えた後即座に友だちは沢山いると付け加えているのは、自己弁護的であり、負けず嫌いであることが分かる。男友達について「一人選んでみました」というのも傲慢な印象。話の内容から、困難に立ち向かおうとする意欲があり、自分に自信を持っていることは分かるが、自分が主導権をとりたいという意欲が強すぎるためか、時に冷静な判断を欠き、強引になりがちではないかと危惧される。

(3) CCRT法による性格分析

ここでは3つの概括的公式化を行うことができよう。

公式化(1)「主体的に行動したい」と思い、「相手が自発性を尊重してくれる」と、「満足する」が、「相手に阻まれる」と、「怒ってしまう」。公式化(2)「力のあるリーダーになりたい(グループをまとめ、後輩を育てたい)」と、「思うような反応が返ってくる」こともあるが、「思うような反応が返ってこない」と、「パニック状態になる」。

公式化(3)「少し頼りたい」と思い、「相手が助けてくれる」。

この事例の中核的葛藤は、「主体的に行動したい」願望と「力のあるリーダーになりたい」願望とが強すぎて、周囲との軋轢を生む可能性があることである。つまりメンバーとして主体的に行動し満足を得るのと、リーダーとして行動することは自ずと違う点があろう。その点が本人には、実際にはリーダーとしてグループをまとめ後輩を育てる役割を十分果たしているように思われるにもかかわらず、「突っ走ってしまう」傾向として自覚されていると思われる。

(2) 教員、企業人による性格分析の妥当性

ここでは経験に基づいた性格分析と精神分析的な方法論に基づいたCCRT法による性格分析を比較する。

事例1

CCRT法による性格分析では、依存願望と自立願望の葛藤があり、両者の妥協形成として「自立願望を理解してくれる、支えてくれる」範囲で対人関係を保とうとするため、対人関係が表面的で深められなくなっていると理解した。教員による性格分析では、「自分にとっての損得を重視する」、「相手にのめり込まない」、「人間関係を客観的に見る」、「好き嫌いがはっきりしている」のように対人関係の持ち方に距離があると見ており、また企業人による性格分析でも、「固い人で、優等生的価値観をはみ出すことが難しい」と見るように、共にCCRT法による理解と共通している。一方、課題解決行動について、教員による分析では「一本芯が通っており、意志の強さが感じられる」、「柔軟性、協調性に欠けるように思われるが、仕事を任せれば最後まで責任を持ってやり終える人」と見、企業人による分析でも「決められた仕事は責任を持ってきちんとなす」が、「柔軟性や面白味に欠ける」と見ており、共通している。しかしCCRT法では対人関係エピソードを中心に分析するため、この点の検討はできない。話の内容から推測すると、この事例の場合、依存と自立の間を揺れているため、少なくとも自分の仕事や勉強に自信を持って生き生きと打ち込むことは難しいとは言えるのではないだろうか。

事例2

CCRT法による分析から、「対人関係における被害感が強く、不安定になりやすいが、親身にされれば肯定的な対人関係を持てる」と、事例2を理解した。教員による性格分析では、「自意識過剰気味で、自分がどう思われ、評価されているかを常に意識している」、「人のことをいつも気にしている」、「人とのつきあいは自

分から作る方ではない」などと指摘し、企業人による性格分析でも、「対人関係での弱さが目立つ」、「友人との付き合いも流されているだけ」、「受動的で積極性に欠ける。自己主張も弱い」と分析しており、対人緊張や対人的な弱さについてCCRT法による分析と基本的な理解は共通していると言えよう。また、「スムーズな人間関係を作ることを、家庭環境の中から学んでいる」（教員による分析）、「協調性は高いと言えるが、職場に面倒をみてくれるタイプの人がないと続けられなくなる可能性がある」（企業人による分析）も、CCRT法と同一線上の理解であろう。

一方、企業人による分析では、「本質を掴んで適切に伝えることができない」、「相手の要求している物が何であるかを正確に理解することができない」、「自分の言いたいことを説得力を持って理路整然と説明する力が弱い」、「自分の応答に自分でも自信が持てないでいる。この場面に限ったことでなく自信のない人であろう」など、また教員による分析でも、「話が切れ目なく続き、終結しない」と、対処行動における問題点が指摘されている。知的に高くても被害感の強さから適切な行動が阻害される可能性があるかもしれないが、CCRT法では推測の範囲でしか言えないので、この点については比較ができない。

事例 3

CCRT法による性格分析では、「人に反対された時に、気まずくならないように抑える」とか、「本当はプレッシャーを感じたりコンプレクスを感じているのに、それを刺激にして前向きに取ろうとする」と言うような対人関係における抑圧、否認、美化の強さ、逆に言えば社会適応性の良さを指摘した。教員による性格分析では、「人間関係を大切にし、人とうまくやっとうこうという姿勢」、「自分から友だちを作る」、「リーダーシップを取る能力がある」のように対人関係能力の高さが特に指摘され、企業人による性格分析でも、面接態度から「話の内容も

ビビッドで具体性に富み説得力がある。時に自分の弱みや本音も吐露していることから……率直に語っている印象がある」と、面接官が好印象を抱いたことを示している。このようにCCRT法、教員、企業人共に社会適応の良さを指摘する点は共通している。加えてCCRT法では、抑圧、否認の強さを指摘したが、教員による分析でも「話し方から神経質に感じられる」という関連性のある指摘がなされている。

一方、企業人による分析では「要求されていることの本質を掴み、その全体像を見通しながら一つ一つの部分について過不足なく必要な情報を組み込み、理路整然と全体を組立てていく能力がある」、「自分の考えや応答を客観的な視点で捉える冷静さも持っている」、「指示通りに課題をこなすだけでなく、本人の判断を信頼して仕事を任せられる可能性を感じる」と言うように、特に課題解決能力の高さが評価された。また「……基本的にどんな場面にも主体的に関わっていこうとすることのできる人、つまり自分に対する自信、信念のある人」と見ており、教員による分析でも「自分の進路についてしっかり把握している」のように同じような指摘がある。CCRT法では個性化願望の強さを指摘した。推測ではあるが、自分の進路や自分の仕事を見つけないという意識が高いだけに、それだけ現実生活でもその裏付けがある行動をしている可能性が高いと言えよう。

事例 4

教員による性格分析では、「仲間作りが上手。相手に対する思いやりがある」、「メンバーや子供たちを楽しませ、キャンプを成功させるためには時間や労力を惜しまない」のように、「指導力、企画力、忍耐力、協調性が大いにある」、「相手の目を見て熱心に話す。声に優しさ、柔らかさがある」と好意的に評価している。一方、企業人による性格分析ではそれとは逆に、「困難に立ち向かおうとする意欲があり、自分に自信を持っていることは分かる」が、「自分が主導権をとりたいという意欲が強すぎるためか、

時に冷静な判断を欠き、強引になりがちではないかと危惧される」、「自分自身を表現したい気持ちがあまりにも強いため、冷静に課題に取り組めず、独りよがりになりがちであることが容易に伺われる」、「自己弁護的であり、負けず嫌いである」とかなり批判的に見ている。

これらに対してCCRT法による性格分析では、「主体的に行動したい」願望と「力のあるリーダーになりたい」願望とを指摘した。話の内容から現実メンバー、リーダーとして集団行動をしてきており、その事実からそれなりの対人関係能力は備わっていると考えてよいであろう。しかしCCRT法では「主体的に行動したい」願望と「力のあるリーダーになりたい」願望が共に強い場合、周囲との軋轢を生む可能性も指摘した。つまりメンバーとして主体的に行動し満足を得るのと、リーダーとして行動することは自ずと違う点があり、リーダーとしてはまだ成長することが必要であり、乗り越える課題があるように推測される。本人が「リーダーとして思うようにうまくまとめられない」、「突っ走ってしまう」と自覚しているのは、その点であると思われる。

従って教員による性格分析はCCRT法による分析の前者を取り上げたもので、企業人の場合は後者を強調したものと考えられる。確かに後者の点について、「主体的に行動し、自発性を尊重されると満足する」この人にとって、企業のように指示通りに課題をこなすことが要求される環境では、「子供を育てる会」とは違って満足が得られず適切に対処できないことがあるかもしれない。

(3) 教員及び企業人による性格分析の評価基準

ここではそれぞれが面接データを通して性格分析をする際に用いた基準を、評価後に言語化してもらったものを素材にして比較した。

A. 教員の評価基準

a. 今回の面接では、特に海外研修旅行で被面接者と寝食を共にしている期間中であったため、

まったく被面接者と面識のない企業人による評価とは多少のズレや違いが出てくるのは当然であろう。また評価に当たり、言葉が表す内容のみならず、被面接者の表情、目の動き、身振り手振りや声のトーンなどと言った body language も含めて判断材料にしている。

b. 企業の人事面接では、選別や落とすために減点主義で作業が行われる。しかし教員の面接訓練では、学生が希望する企業・職種への面接が首尾良く行くように、学生の良い面を引き出そう、よりよく評価したいという重いが教員側に強くある。そのため、学生の評価にはやや客観性に欠けるきらいがあるのではないかと思われる。

c. 教員自身が過去15年間企業などで働いた経験から、仕事を継続しよりよい職業生活を送っていく上で、スムーズな人間関係を気づく能力、すなわち人間関係形成力が必要不可欠であると思っている。従って、被面接者の対人適応能力に注目し、企業で実際に仕事を任せただけを想定しながら性格分析を行っている。

B. 企業人の評価基準

a. 「質問に対する答え」を「与えられた課題に対する対処」と捉えて、この中で本人の課題対処能力と課題対処における態度を見ようとする。

b. 人事面接は、基本的に自分を売り込みたいと思っている人たちを対象としていることが特徴である。面接場面では自分をよく見せたいという気持ちが動いている可能性を前提として考える。そこで発言内容そのものを額面通りに受け取る前に発言のリアリティを吟味したり、発言の背後にある気持ちを推測したり、それらと発言のギャップに注目することでその人の性格を分析しようとする。

4. 考察

(1) 就職面接による学生理解の信頼性および妥当性

本稿では、就職面接訓練でなされた会話をもとにした教員、企業人による性格分析が、どの程度の信頼性と妥当性を持つものかを検討した。具体的には教員および企業人による性格分析の比較、それらとCCRT法による分析との比較を通して、短時間の面接から学生の人物評価、性格分析がどの程度可能なのかについて調べた。判定の基準とする心理分析の方法としてCCRT法を採用したので、特に対人関係エピソードに焦点を当てることになり、そのため就職面接としては学生の対人関係のみに関心を向けることとなった。従って現実の面接とは若干、異なったものになったきらいはあるが、その点を考慮に入れても次のような肯定的な結果が得られた。

まず(1)就職面接では、学生の対人適応、課題解決能力を見ている。しかしCCRT法は対人関係エピソードを分析するので、主として対人適応について比較したことになり、課題解決能力については推測の範囲で検討された。その結果、(2)対人適応について、教員および企業人による分析は、それぞれCCRT法による分析と基本的な点でかなり一致していた。また納得できることではあるが、(3)CCRT法では表面に現れた行動の背後にある力動的過程が分析され、教員、企業人による分析ではそこまで踏み込んだ分析はなされなかった。一方、(4)課題解決能力については、教員、企業人共に分析が一致している事例が多かった。さらにCCRT法からの推測とも一致した観察が得られた場合が多かった。但し、(4)事例4については、対人適応、課題解決能力ともに教員と企業人の間で評価が分かれ、むしろCCRT法による分析が両者の分析の違いを説明するものとなった。従って(5)教員と企業人による性格分析、評定の一致度はかなり高いものとなった。

A. 教員および企業人の評定の一致度について

上述のように、両者は特に対人適応の評価に

おいて、また課題解決能力についてもかなりの程度評定が一致していた。具体的には4事例の内、1例のみ評価が分かれた。従って今回の検討した範囲に於いては、「就職面接」の信頼性はかなり保たれているとみてよのではないかと考える。上述したように大沢(1973)によれば、面接者間の評定の一致度はかなり低く、さらに「能力・知識」などの知的側面に比べ、「性格・人物」や「意欲・熱意」などの動機的・情意的側面の評定は信頼性が低くなるという。今回、それとは異なった結果が得られたのは、本研究では同一の面接データを用いて評定を行ったことが面接者間の評定の一致度を高めたと考えられる。

しかし教員、企業人それぞれの評価基準に違いがあるのも明確になったように思われる。評定内容の相互比較からも、教員、企業人それぞれによる評価基準の言語化の比較からも、教員は教育的観点および対人適応から学生を見ようとし、企業人はよりよい人材の選別・選抜の観点および課題対処の観点から学生を評価しようとしているようで、それが評定の微妙な差になって現れたと考えられる。

B. 就職面接の併存的妥当性について

全体として、対人関係をテーマにした、しかも短時間の面接にも関わらず、教員、企業人の性格分析はCCRT法を基準に見た場合、共にかなりの程度、評定は共通しており、併存的妥当性があるものと言えよう。上述した若林・南・佐野(1980)の研究では、面接試験は精神的分化度、小論文、英語、面接などの個別のテストバッテリーと正の相関を持っていることが明らかにされている。しかし面接の予測的妥当性についての研究は一定した評価がなく、また併存的妥当性の研究は筆者らの知る限りの範囲では見られなかった。今回の研究で併存的妥当性が確認されたことを契機に、今後さらに研究を進める価値があるように思われた。

(2) 自己探索の機会としての就職面接訓練

筆者らは就職面接訓練を単に就職対策として

のみ行うのではなく、学生の自己分析、自己探索の機会ともなるようにしたいと考えている。そのような効果を上げるために面接をどのように行うのがよいか、今回の分析結果から示唆されることを考えてみたい。

まず(1)実際の就職面接ではさまざまな話題が取り上げられるが、学生の性格分析のためには対人関係エピソードに限る方がより有効であるように思われた。つまり対人関係に絞ったために、その人の対人適応が浮き彫りにされたと考えられるからである。その上、質問への答え方から課題対処能力も併せて推測できるので、より効率的に学生把握ができるように思われた。次に(2)CCRT法を学生の自己探索のために利用できないかという点である。学生に面接テープをもとに逐語記録を作成させ、願望、他者の反応、自己の反応を含むエピソードとして再構成させるのである。それらを筆者らが読み込むことによっておよその分析が可能になり、そこから学生の対人関係上の問題点が指摘できるのではないかと考える。特に(3)面接を進める時に、願望、他者の反応、自己の反応が含まれるように質問をして行けるならば、その場で対人関係上の問題点を指摘し、それについて自覚させることが可能になると思われる。

引用文献

Luborsky, L. 1984 *Principles of Psychoanalytic Psychotherapy: A Manual for*

Supportive Expressive Treatment. Basic Books. (竹友安彦監訳 1990 精神分析的精神療法の原則 支持-表出法マニュアル, 岩崎学術出版社.)

Luborsky, L. & Crits-Christoph, P. 1990 *Understanding Transference: The Core Conflictual Relationship Theme Method*. Basic Books.

西河正行 1985 学校から社会へ—専門学校に学ぶ女子学生のキャリア発達—津田スクールオブビジネス紀要, 2.

西河正行 1991 女子学生のキャリア発達の規定要因について—短大生と専門学校生の職業選択行動の違いを通して—津田スクールオブビジネス紀要, 8.

西河正行 1993 女子学生のキャリア発達の規定要因について—就職活動の継時的分析を通して—, 共栄学園短期大学研究紀要, 9.

西河正行 1995 CCRT法を通してみた女性のエディプス・コンプレックスのあらわれ—学生相談室で会った女子学生の初期面接の検討を通して—, 共栄学園短期大学研究紀要, 11.

大沢武志 1973 採用試験の知識, 日本経済新聞社. 産業・組織心理学会(編) 1994 産業・組織心理学研究の動向, 学文社.

若林満・南隆男・佐野勝男 1980 我が国産業組織における大卒新入社員のキャリア発達過程—その継時的分析, 組織行動研究, 6.

資料：CCRT法による性格分析の詳細

事例1 (JK)

対人関係エピソード

1. 友人A

- #1 私が彼女と友だちになったのは、高校3年生の夏休みからです。(略) 同じような考え方だったり、違っていてもそれを理解し合えて、お互いに理解し合おうとして、認め合って、そういう時間を持つことがとっても楽しかったし、自分にとって成長するのにとてもプラスになって。だから彼女と一緒にいる時間をできるだけ取るようにしていたし、……
- #2 私は受験の時に、一度やっぱりいらいらしたこともあったし、彼女は受験勉強をしていなかったのだから、私の辛さは半分程度しか理解できないというのもあったし、それでちょっとこじれた時もあったんですけど、お互いやっぱり離れたくない、絶対つきあっていきたいっておもっていたから。
- #3 彼女はダイビングのインストラクターになるために就職した(略) 何度も何度も辛い思いをしたりして、でも近くにそういうことを言える友だちがいなくて言っていて、(略) 精神的にその子が負けそうになった時とか、助けてあげたいと思って、その気持ちは分かってくれて、とっても支えになっているみたいです。

2. 恋人

- # 4 その人は彼女が紹介してくれた人で、恋人としてつきあっています。(略) 毎日、電話をくれて、会えない分、その日にあったことや嬉しかったこと、悲しかったことを話してくれ、私もお互いに話して、できるだけ理解を深めあうように付き合っています。
- # 5 向こうが一目惚れしてくれて、すごく大切に思ってくれて。(略) <もっとステディな関係になる予感がありますか>はい。私は一緒にいてくつろいでほしいから、それは誰に対してでもなんですけど、下手に気を使ってくれたりするのは嫌だから、お互いに会った時に一番とは言わなくても安心できる時間、場所でありたいと思っています。
- # 6 <具体的なエピソードとかは?>彼の気持ちがすごく強いから、自分に対して、だから夜中10時まで仕事をしていても、12時くらいに会いに来て、こっちへ来ると3時くらいになっちゃうんですけど、そんな風に来てくれたりもするし、本当に離れていても全然不安とかはなくて。<ずっと一緒にいたいと思うの?>一緒にいると安心できるからいたいなって思うけど、それで自分の目標とか、彼のことしか頭になかったり、そういうのは私は嫌いだから、自分の目標とか生き方は見失いたくないので(略) マイナスになる関係になりそうだったら、付き合うのを考えてしまいます。

事例1 (JK)

RE# 対象	願望、要求、意図	対象の反応	自己の反応
友人A # 1	だから彼女と一緒にいる時間をできるだけ取るようにしていたし、同じような考え方だったり、違ってもそれを理解し合えて、お互いに理解し合おうとして、	(同じような考え方だったり、違っていてもそれを理解し合えて、お互いに理解し合おうとして、) 認め合って	そういう時間を持つことがとっても楽しかったし、自分にとって成長するのにとてもプラスになって、
# 2	お互いやっぱり離れたくない、絶対つきあっていきたいっておもっていたから。	彼女は受験勉強をしていなかったの、私の辛さは半分程度しか理解できないというのもあったし、	私は受験の時に、一度やっぱりいらいらしたこともあったし、
# 3	精神的にその子が負けそうになった時とか、助けてあげたいと思って、	その気持ちは分かってくれて、とっても支えになっているみたいです。	
恋人 # 4	私もお互いに話して、できるだけ理解を深めあうように付き合っています。	毎日、電話をくれて、会えない分、その日にあったことや嬉しかったこと、悲しかったことを話してくれ、	
# 5	私は一緒にいてくつろいでほしいから、それは誰に対してでもなんですけど、下手に気を使ってくれたりするのは嫌だから、お互いに会った時に一番とは言わなくても安心できる時間、場所でありたいと思っています。	向こうが一目惚れしてくれて、すごく大切に思ってくれて。	
# 6	一緒にいると安心できるからいたいなって思うけど、それで自分の目標とか、彼のことしか頭になかったり、そういうのは私は嫌いだから、自分の目標とか生き方は見失いたくないので(略) マイナスになる関係になりそうだったら、付き合うのを考えてしまいます。	彼の気持ちがすごく強いから、自分に対して、だから夜中10時まで仕事をしていても、12時くらいに会いに来て、こっちへ来ると3時くらいになっちゃうんですけど、そんな風に来てくれたりもするし、	本当に離れていても全然不安とかはなくて。
概括的臨床 公式化(1)	一緒にいて安心したい (理解し、支え合いたい)	相手が話してくれ、理解し合える 相手が大切に思ってくれる 助けてあげたい気持ちは分かってくれた	楽しい、自分の成長のプラスになる 離れていても、不安はない
		半分しか理解されない	イライラする
公式化(2)	一緒にいて、自分の目標、生き方は見失いたくない		

ここでは2つの概括的公式化を行うことができよう。

(1)「一緒にいて安心したい(理解し、支えた合いたい)」(願望)と思い、「相手が話してくれ、大切に思ってくれる」(対象の反応)と、「安心できるし、楽しいし、自分の成長のプラスになる」(自己の反応)が、「半分しか理解されず、支えられない」(対象の反応)と、「イライラする」(自己の反応)。

(2)「一緒にいたい、自分の目標、生き方は見失いたくない」(願望)。

事例2 (AU)

対人関係エピソード

1. 友人A

#1 小学校、中学校と結構、内気な方で、ひどい時にはクラスで浮いていた時期がある位、内気だったんですよ。中学3年のクラスで、ある一人の友だちがきっかけでクラスに馴染むことができ、今みたいにどんなタイプの人間とも友だちになれる人間になれたんですけど(略)一人の人に会ったことで自分の性格とか運命とかが180度変わるってような(略)高校に入学することをきっかけとして、自分のことを知っている人間がすごい少なくなるじゃないですか。だからそれをきっかけに自分を変えてみて、高校に入ってから結構、明るくなっていうか、普通の人間になれたんですよ。(略)中3の時、家庭科の時間に、クラスメートの子が「Uさんって、1年生、2年生の時って、全然喋らなかったよね」とか言ったんですよ。そして私の友だちが「自分が明るくしたくても、周りがそうさせてくれない時もある(略)」って結構、厳しい口調で言ってくれたのがすごい嬉しかったです。(略)自分が独りぼっちでいるところを見られるのがすごい嫌だから、自分自身努力して友だちを作るようにしたりした。

#2 <友だちとの関係でうまくいかなかったりしたことは?>私って自意識過剰ってわけじゃないんですけど、人がなんかヒソヒソ話してたり、自分が話しかけた時、素っ気なかったりすると、もしかしてこの人私のこと嫌いなのかなあって、すごい気にしちゃうんですよ。友だちからちょっと言われたりすると落ち込んで、その友だちにも叱られたことがあるんですけど、あの人私のこと嫌いみたいなんだけどとか言うと、それは気にしすぎだとか言ってくれたんですけど。

#3 中学2年から部活やって、卓球なんですけど、途中入部したんで不安だったんですよ。で、その子がその時、部長で遠くから見てたんですよ。(略)本当に優しくって、一人でいると声をかけてくれる人、で、その内、中3になって友だちになって、(略)

2. 男の友だち

#4 (略)基本的に優しい人、一人、二人で喋っていても、私のことを見てくれるっていうか、男の子の友だちは多い方じゃないんですけど、その人と会ったのは最近なんですけど、(略)1回しか会っていないんですよ、電話はしているんですけど、アメリカ短期留学の時も、留守電に入れたりしているんですけど、やっぱりコミュニケーション取りづらいです。やっぱり好きな人には嫌われたくないし。

3. 短大の友だち

#5 今の短大でいつも行動を一緒にしている友だちが4人なんですよ。(略)今、一番私の仲のいい人は、出席番号が隣で、入学式の時、隣に座ってたんですよ。そこで声を掛けてもらって、(略)そこで一層、仲良くなって、その時のクラスメートが今の4人なんですよ。(略)プライベートで仲良くしている割にはお互いのことを知らないと言えば知らない。本当にいい子たちで自分自身好きなんですけど、表面上の付き合いっていうか、広く浅くなりましたね、最近。

4. 姉

#6 一番尊敬っていうか、すべてにおいて相談役って言うか、人に言えないようなことを喋れる人が姉なんですよ。(略)母は過去に一回結婚していたんですよ。でその人との間に今の姉が生まれて、その後、離婚してしまって、(略)やっぱ、他人って言う訳じゃないんですけど、他人なんです。だから喧嘩したことないです、一回も。<年が離れていることもあったかもしれないね>私が中学に入ってから仲良くなって、(略)いい関係なんですけど、だから姉に対しては失礼なことは言えないっていうか。「似合わない?」って聞かれても、普通の兄弟なら「やめなよ、似合わない」とか、そういうこと言えないんですよ。嫌われたくないっていうか、それでお化粧の仕方も教わったし、その彼氏との付き合い方も教えてもらっているというか、相談に乗ってもらっている、で洋服とかも買ってくれるし、食事もおごってくれたり。で、いい関係が続いているんですけど。(略)憧れの人なんです。私にとって姉は、(略)姉はやっぱり苦労しているせいか、人の痛みがすごい分かる人、悩みとか言ってもそれは違うとか言わないで、本当に聞いているだけなんです。相づちを打ってるだけなんですけど、すごい心強いって言うか。

事例2 (AU)

RE# 対象	願望、要求、意図	対象の反応	自己の反応
友人A #1	高校に入学することをきっかけとして、自分のことを知っている人間がすごい少なくなるじゃないですか。だからそれをきっかけに自分を変えてみて、高校に入ってから結構、明るいついていうか、普通の人間になれたんですよ。自分が独りぼっちでいるところを見られるのがすごい嫌だから、自分自身努力して友だちを作るようにしたりした。	中3の時、家庭科の時間に、クラスメートの子が「Uさんて、1年生、2年生の時って、全然喋らなかつたよね」とか言ったんですよ。そしたら私の友だちが「自分が明るくしたくても、周りがそうさせてくれない時もある(略)と、結構、厳しい口調で言ってくれたのがすごい嬉しかったです。	私の友だちが「…略…」と、結構、厳しい口調で言ってくれたのがすごい嬉しかったです。
#2		その友だちにも叱られたことがあるんですけど。あの人が私のことを嫌みたいなんだけどとか言うとか、それは気にしすぎだとか言ってくれたんですよ。人がなんかヒソヒソ話してたり、自分が話しかけた時、素っ気なかったりすると、もしかしてこの人私のこと嫌いなのかなって、すごい気にしちゃうんですよ。友だちからちょっと言われたりすると落ち込んで。	人がなんかヒソヒソ話してたり、自分が話しかけた時、素っ気なかったりすると、もしかしてこの人私のこと嫌いなのかなって、すごい気にしちゃうんですよ。友だちからちょっと言われたりすると落ち込んで。
#3		中学2年から部活やって、卓球なんですけど、途中入部したんで不安だったんですよ。その子がその時、部長で遠くから見てたんですよ。(略)本当に優しくって、一人でいると声をかけてくれる人で、その内、中3になって友だちになって、	
男の友だち #4	やっぱり好きな人に嫌われたくないし。	基本的に優しい人、一人、二人で喋っていても、私のことを見てくれる。	
短大の友人 #5		今、一番私の仲のいい人は、出席番号が隣で、入学式の時、隣に座ってたんですよ。そこで声を掛けてもらって、	本当にいい子たちで自分自身好きなんですけど、表面上の付き合いっていうか、広く浅くなりましたね、最近。
姉 #6	いい関係なんですけど、だから姉に対しては失礼なことはいっていいか。「似合わない？」って聞かれても、普通の兄弟なら「やめなよ、似合わない」とか、そういうこと言えないんですよ。嫌われたくないっていいか。	お化粧の仕方とかも教わったし、その彼氏との付き合い方も教えてもらっているというか、相談に乗ってもらっている、で洋服とかも買ってくれるし、食事もおごってくれたり。	姉はやっぱり苦労しているせいか、人の痛みがすごい分かる人、悩みとか言ってもそれは違うとか言わないで、本当に聞いているだけなんです。相づちを打てるだけなんですけど、すごい心強いって言うか。
概括的臨床 公式化(1)	暗い人間と思われ、嫌われたくない(明るい人間になり、友だちを作りたい)	親身になって助けてくれる	すごく嬉しく、心強い
		嫌われる	気にして、落ち込む

ここでは1つの概括的公式化を行うことができよう。

(1)「(暗い人間と思われ、嫌われたくないので、) 明るい人間になり、友だちを作りたい」(願望) と思い、「相手が親身になって助けてくれる」(対象の反応) と、「すごい嬉しく、心強い」(自己の反応) が、「嫌われていると思う」(対象の反応) と、「気にして、落ち込む」(自己の反応)。

この事例では、対人関係における被害感の強さが中核的葛藤を構成している。嫌われているか、いないかで、不安定になりやすいところが問題であろう。

事例3 (A E)

対人関係エピソード

1. 友人A

1 中学になって同じ部活に入り、ずっと一緒にプレーしてきた友だちなのですが、二人いるのですが、(略) 一人は実は今も同じ短大にいて、高校も一緒に(略) もう一人は女子校に行ったんですが、今は専門学校に通っています。(略) 短大が同じ友だちが何かと一緒にいるんだけど、同じような服を着ていても、どちらかというコンプレックスをお互いが持っているような感じで、(略) 自分で何かを決めていく中で、相手の方がいいなって、そう思いながら、コンプレックスを持ちながら、それが逆に刺激になってると私は思うんです。

2 <気まづくなったりしたことは?> 友だちは結構、自分の意思をはっきり言ってくる子なんですよね。私がそこにカチンときて言い返したとすれば喧嘩になると思うんですけども、そういう性格を承知しているつもりなんで、そこでは抑えて、それだからと言って気まづくなることもないし、だから正直言って喧嘩したことはないんですね。友だちと気まづくなるのは嫌いなんで、友だちたくさん作るの好きだし、そういうことはないですね。

2. 友人B

3 もう一人の友だちの方は今の進路の進み方も全く違って、私はそれにとっても憧れを感じてるんですね。(略) その人は結構、前向きに頑張っているんで、仕事が大変だって聞くと、私はどうしようかなって感じで、とても刺激になりますね。(略) お互いにみんな興味を持ってるので、これからどうなっていくかはすごく楽しみなんで、これからも今まで通りに連絡は取り合いたいと思います。

3. 男の友だち

4 部活のキャプテン同士だったんですよ。どうしても部内のごたごたの悩みが溜まってくるじゃないですか。(略) 夜遅く電話したり、正直、愚痴のこぼしあみたいになっちゃうんですよ。(略) 今も結構、続いていて、私の悩みなんかも聞いてくれて、いい関係が保ててると思うんですけど、その人とは電話が多いんですけど、浪人生なんで、(略)。<この先はどうなりますか?> 考え方が似てるんですよ。それですごく一致する部分があって、また話が盛り上がるってことが多くて。(略) その人も将来どうするかっていうのを悩んでいるタイプなんですよ。(略) 将来的にはとても興味のある人なんで、ただやっぱり愚痴を聞いてもらってる相手となってしまってるんで、この先もやっぱりこの関係が続けばいいなと私は思うんですけどね。

4. 父

5 尊敬しているというなら、私の父なんですけど、今マレーシアにいまして、私が幼稚園に入る頃初めてシンガポールに発って(略) 半年に一度2週間の休暇で帰ってくるという生活が続いて、東南アジアを転々としてたんですが、(略) お父さんのことあまりいいように思ったことはなかったんですよ。それで中学に入って、こっちに帰国して少しいた時期があって、お父さんも責任を感じているせいか、すごく優しくしてくれる面なんかがあって、ようやくそれでお父さんってのが分かってきたような、(略) 何語で生活してるか聞いた時に、英語を喋ってるって言われ、どこで習ったのと聞いたら、仕事をしているから習えるわけがないだろうって言われ、私ももう中学生なんで、もしかしたらお父さんすごい人なんじゃないかなって思えてきて。(略) 外国で仕事できる父親って素晴らしいなって思えてきて、今では一番尊敬できるんじゃないかなと思っているんですけど。

6 (略) オーストラリアに高校1年の時に行った時に、私は英会話は全く身に付いてなくて、(略) お父さんが人前で喋って自分の知っているものを言っていくだけでも違うんだって、私をいろいろ使うんですよ。フロントにタクシーを呼びたいと言って来なさいとか、そんなことをしている内に、本当に英語を喋りたいっていう風に思ったんですよ。将来も英語を使って、お父さんみたいにいろんな外国人と接することができるような仕事に就きたいなって、強く思えるようになって。

7 今、お父さんと話す機会っていうのは、その日の仕事が終わって帰る時に自動車電話で10分位、電話を

掛けてくるんですね。(略)お父さんも最近年をとったせいか、なんだか寂しいらしくて、(略)毎日掛かってくるときもあるし、本当に喋る機会も増え、前はお父さんに言えないことたくさんあったんですけど、最近と言えるようになって、かえってお母さんに将来のことを相談するよりお父さんに相談することの方が多くなって、(略)分かってもらえるというか、やりたいことがあったらそれはやるべきだと、満足できるようになって言ってくれて、(略)とてもうれしいというか、(略)逆にお父さんの言葉は嬉しいんですけど、意外とプレッシャーが多いことが多くて、でもそのプレッシャーが本当に自分に頑張れるっていう自信を持たせてくれるっていう感じですね。

5. 母

#8 お母さんは海外に対する恐怖心がものすごくある人だから、私が出ていきたいって言うことをとても反対するんですよ。やっぱり危険なこともあるからってことで。(略)

次頁の整理から分かるように、ここでは1つの概括的公式化を行うことができよう。

(1)「個人的で仕事ができる人間になりたい(そのため友だちを参考にしたり、父などに相談したい)」(願望)と思い、「相手が優しくしてくれたり、分かってくれたり、鍛えてくれる」(対象の反応)と、「プレッシャーが刺激になり、自信を持たせてくれる」(自己の反応)が、「はっきり反対される」(対象の反応)と、「カチンと来るが、抑える」(自己の反応)。

この事例の中核的葛藤は2つの点で生じるように思われる。まず人を参考にしたり、人に相談したりして、はっきり反対された時に、気まずくならないように抑える点である。次は好意的な反応の場合でも、本当はプレッシャーを感じたりコンプレクスを感じているのに、それを刺激にして前向きに取り組もうとする点である。そのいずれの対応にも強がりや否認があるので、それが破綻すると葛藤が体験されてくると思われる。この人はよく言えば頑張りやさん、悪く言えば強がりと言えよう。

事例4 (AK)

対人関係エピソード

エピソードを記述する前に、彼女の人生において重要な位置を占める「子供を育てる会」について概略する。母親に勧められて小学校2年生の時に「子供を育てる会」(劇を鑑賞したり、キャンプに行ったりする活動を行う)に入会した。以来12年間、始めはメンバーとして、やがて高校生からはスタッフの一員として活動を続けてきた。幼なじみの友人Aとはこの活動を通して親しくなり、共にスタッフとして今も交流が続けられている。また現在、北海道の大学に行っている男性の友人Bも、同級生で小・中学校以来、活動を共にしている。

1. 「子供を育てる会」の青年たち

#1 小学校5年生以上が行けるキャンプがあったんですよ。(略)中心は青年の人たちだったんですけど、例えば「食事何食べたい?」って、カレーだったら、「じゃあカレーにしよう」って。(略)「今日は何やりたい?」って、「山登りたい」って、「じゃあ山登ろう」。それもみんな事前に下見に行ってくれて、スムーズにいったんですけど、その時、結構、いいなあと思って。6年生の時も行ったんですよ。友だちはその子だけじゃなくて広がってきて、で、とっても楽しくなって。(略)キャンプファイヤーがすごいイベントなんですけど、キャンプファイヤーも全部、青年の人たちが作ってくれるから、すごい楽しいんですよ。で中学生もキャンプファイヤーは関わっていて、それで早く中学生になりたいなあと思って、で中学生になったら、今度は高校生になりたいなあと思って、高校生になったら、今度は青年になりたいなあ、みたいな。

2. 「子供を育てる会」の後輩たち

#2 高校卒業して、私とその子が青年になったんですけど、(略)小学校で初参加の子とか、私が受けた感じをどれだけ受けてくれるのかとか、どれだけ憧れてくれるのかなとか、結構、作ったんですけど、で、やっぱりよくて。

3. スタッフ

#3 根本的に性格が違うんですよ。その子はとってもおっとりしててふにゃーんとしてるでしょ。怒らないような性格で、私はどちらかというと、どんどん行っちゃうみたいな、私の方が突っ走っちゃう、キャンプの話し合い何かしても、私は次の議題に行きたい、行きたいみたいな感じで、その子はおっとりと話して、雑談しちゃったりとか、(略)私がいつも怒っちゃう方なんですよ。というか、ちょっと機嫌が悪くなっちゃうとか、その子はおっとりしているから、「Aさん、今日機嫌が悪いわねえ」とか言って、そうすると私ますますムカムカってきちゃって、「怒ってないよ、別にそんなに気分悪くないよ」って言うんですけど。大きな喧嘩はしたことないんです。大きな喧嘩するとその子、おっとりしているんだけど、芯は強いつて言うか、言いたいことを言うときは言うんです。

事例3 (AE)

RE# 対象	願望、要求、意図	対象の反応	自己の反応
友人A #1			同じような服を着ていても、どちらかというコンプレックスをお互いが持っているような感じで、(略)自分で何かを決めていく中で、相手の方がいいなって、そう思いながら、コンプレックスを持ちながら、それが逆に刺激になってると私は思うんです。
#2	友だちと気まづくなるのは嫌いなので、友だちたくさん作るの好きだし、そういうことはないですね。	友だちは結構、自分の意思ははっきり言ってくる子なんですよね。	私がそこにカチンときて言い返したとすれば喧嘩になると思んですけども、そういう性格を承知しているつもりなんで、そこでは抑さえ、それだからと言って気まづくなることもないし、
友人B #3	お互いにみんな興味を持ってるので、これからどうなっていくかはすごく楽しみなので、これからも今まで通りに連絡は取り合いたいと思います。		その人は結構、前向きに頑張っているんで、仕事が大変だって聞くと、私はどうしようかなって感じて、とても刺激になりますね。
男の友だち #4	やっぱり愚痴を聞いてもらってる相手となってしまってるんで、この先もやっぱりこの関係が続けば一番いいなと私は思うんですけどね。その人も将来どうするかっていうのを悩んでいるタイプなんです。 (略) 将来的にはとても興味のある人なんで、	私の悩みなんかも聞いてくれて、いい関係が保てると思うんですけど。考え方が似てるんですよ。それですごく一致する部分があって、また話が盛り上がる事が多くて。	
父 #5		お父さんのことをあまりいいように思ったことはなかったんですよ。それで中学に入って、こっちに帰国して少しいた時期があって、お父さんも責任を感じているせいか、すごく優しくしてくれる面なんかがあって、ようやくそれでお父さんってのが分かってきたような、	私ももう中学生なんで、もしかしたらお父さんすごい人なんじゃないかなって思えてきて。(略) 外国で仕事できる父親って素晴らしいなって思えてきて、今では一番尊敬できるんじゃないかなって思っているんですけど。
#6		お父さんが人前にでていって自分の知っているものを言っていくだけでも違うんだって、私をいろいろ使ってください。フロントにタクシーを呼びたいと言って来なさいとか。	そんなことをしている内に、本当に英語を喋りたいっていう風に思ったんですよ。将来も英語を使って、お父さんみたいにいろんな外国人と接することができるような仕事に就きたいなって、強く思えるようになって。
#7	前はお父さんに言えないことたくさんあったんですけど、最近は言えるようになって、かえってお母さんに将来のことを相談するよりお父さんに相談することの方が多くなって、	分かってもらえるというか、やりたいことがあったらそれはやるべきだと、満足できるよって言ってくれて、	とてもうれしいというか、(略) 逆にお父さんの言葉は嬉しいんですけど、意外とプレッシャーが多いことが多くて、でもそのプレッシャーが本当に自分に頑張れるっていう自信を持たせてくれるっていう感じですね。
母 #8		お母さんは海外に対する恐怖心があるから、私が出ていきたくて言うことをとても反対するんですよ。やっぱり危険なこともあるからってことで。	
概念的臨床公式化 (1)	個性的な人間、仕事ができる人間になりたい (友だちを参考にしたい、父などに相談したい)	優しくしてくれ、分かってくれ、鍛えてくれる はっきり反対される	プレッシャーが刺激になり、自信を持たせてくれる カチンと来るが、抑える

4 キャンプファイヤー・リハーサルっていうか、高校生が中心だったから、私とその青年の二人は関わりなかったんですよ。最初の話し合いとか、みんなを見守ってる感じで、高校生が頑張ってる成長してくれればいいなみたいな感じのポジションにいたから、(略)そしたらキャンプファイヤーのリハーサルまでできなかったんですよ。(略)私もその子もパニック状態になっちゃって、喧嘩、もう何が原因だか分からないような喧嘩しちゃうんですよ。(略)その時は私もいろいろ取ってきて、その子に「はい、持ってきたよ」って、別に仲直りするとかしないとかじゃなくて、自然にそうなっちゃってたから。

4. 男性の友人B

5 その人は同じ学年で、私の話した女の子の友だちともとっても仲良しで、他にも劇場で同学年の男の子いるんですけど、一番話しやすく、一番遊んだのはその人なんです。(略)北海道行っちゃったから、夏帰って来ると言う手紙が来て(略)久しぶりだから会おうって、今話した女の子の友だちとも一緒に、(略)別に何を話したっていうわけじゃないんだけど、なんで仲良しかっていうと、何でしょうね、やっぱりキャンプとかってそういう話し合いをしてるから、だんだんそういう親密な関係になったっていうか、どういう関係って言うと、将来分かんないですよ、どういう関係になってるのかなあって、ずっとなんか友だちでいたいなと思うけど。(略)話は合うんですよ。趣味が合うとかじゃなくて、性格的にも合うから。

6 二つに地区が分かれた時に、誰もギター弾ける人がこっちにいなかったんですよ。誰もいなくなっちゃったから困ったぞって思って、私、その人に教えてもらったんですよ、一生懸命。(略)そういうちょこちょことした時に、いつもその人が助けてくれるから、他の人も助けてくれるけど、ちょっと一歩前に出た友だちみたいな感じで見えます。

5. 年上の大学生

7 一緒に班だった時に、何かみんなをまとめる力があつたんですね。(略)いきなり1年間アフリカに行ってきたって感じだったから、えええ？って思って、1年間は全然音沙汰なしで、どうしてるかなあとか思っていましたけど、で、最近帰ってきて、で何でだろうな、何か憧れるって言うか。こういう風に生活したらいいなあって言うような、ちょっと私の理想に近いような。〈具体的に？〉(略)自由とはちょっと違うんですよ。(略)周りをまとめる力とかあるんですよ、結構。うまく言えないけど、見てていいなあとかって、なんでこういう風に生きてるのかなあ、(略)羨ましいのかもかもしれません。キャンプで自分がとっても歯痒い時とか、まとめにくいじゃないですか、全体的に劇場の男の人っていいなあとかって思うかもしれない。まとめる力がある人を見て、男の人の方が頼りがいがあるじゃないですか。

次頁の整理から分かるように、ここでは3つの概括的公式化を行うことができよう。

- (1)「主体的に行動したい」(願望)と思い、「相手が自発性を尊重してくれる」(対象の反応)と、「満足する」(自己の反応)が、「相手に阻まれる」(対象の反応)と、「怒ってしまう」(自己の反応)。
- (2)「力のあるリーダーになりたい(グループをまとめ、後輩を育てたい)」(願望)と思い、「良い反応が返ってくる」(対象の反応)こともあるが、「思うような反応が返ってこない」(対象の反応)と、「パニック状態になる」(自己の反応)。
- (3)「少し頼りたい」(願望)と思い、「相手が助けてくれる」(対象の反応)。

この事例の面接記録の中で、「こういう風に生活したらいいな」という憧れのようなものが語られている。明確に言語化されていないが、「主体的に行動したい」願望と「力のあるリーダーになりたい」願望の両方が内容から推測される。従ってこの事例の中核的葛藤は、これらの願望が強すぎて本人の意識では願望が満たされていないと感じる点にあらう。それが「突っ走ってしまう」傾向として自覚されているのではないだろうか。